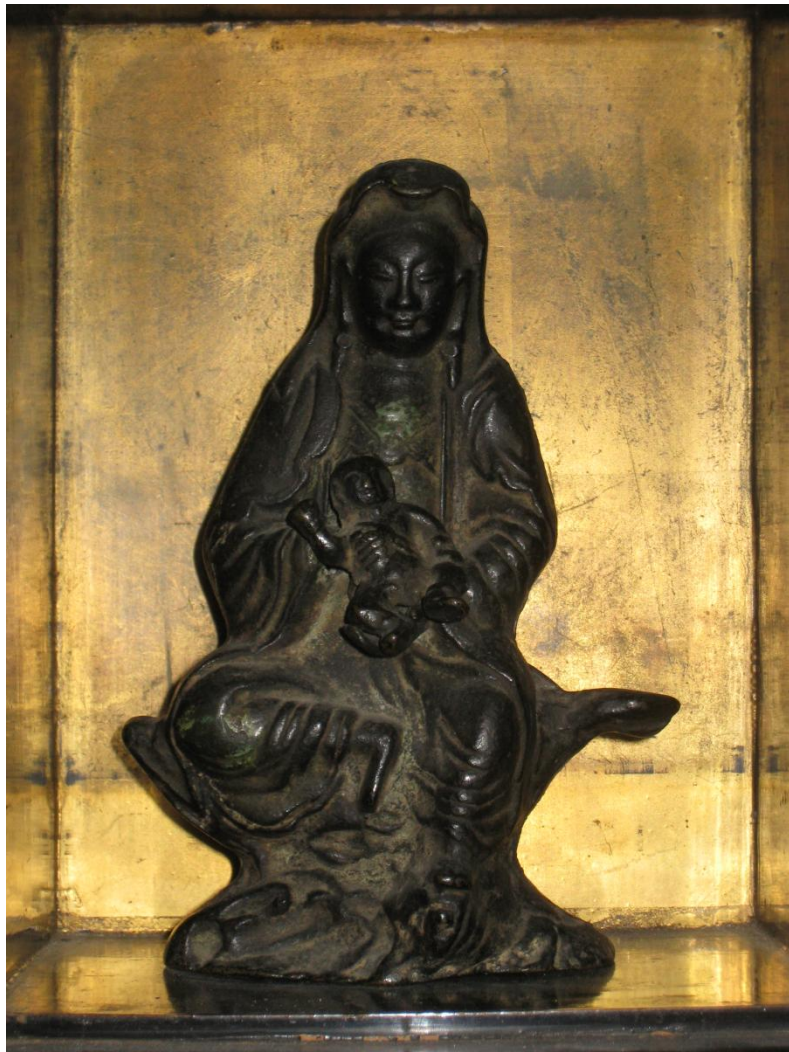
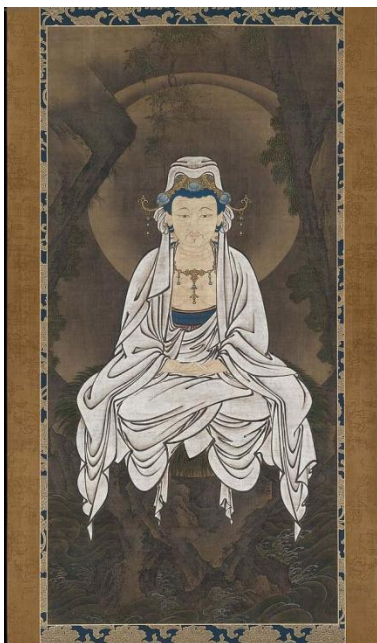


◆マリア観音像 (江戸時代)



(参考画像 白衣観音)



瑠須庵伝来の銅製マリア観音像。見た目は仏教の白衣観音や子安観音であるが、右膝と右足首で十字を連想させるようになっており、また抱いた赤子の足裏には十字架が刻まれている。

隠れ切支丹は本像を聖母マリアとし、抱いた赤子はイエス・キリストとして祈りを捧げた。本像と同型の像が長崎県天草市に残っているが、その像の嘗ての持ち主は、天草町下田鬼海ヶ浦の鬼海氏が所持していたと云う。 (参考文献 平凡社 太陽観音の道シリーズⅢ)

本像が伝わった瑠須庵の地は、露地に奇怪な伝説が残る故、昔から「鬼家 (おやや) の地」として恐れられた。これは人が避けるように敢えて曰くつきの露地石等を集めたからであるが、天草に残っていた同型の像も、嘗ては「鬼」に因んだ名の土地と人であった。

切支丹にとって最も恐れるのは、見つかることである。人が嫌う、足を遠のかせるには恐ろしい伝説を残すことであり、そんな伝説が残る地に敢えて住む事であるのだ。